

麦 作

「北海道 麦作りに挑む人々」 その1

斜里郡清里町 堀川 哲 男・小百合 氏

1 はじめに

平成25年度に本会主催の北海道麦作共励会畑地の部で最優秀賞となり、その後、全国麦作共励会農家の部で全国米麦改良協会会長賞を受賞された堀川哲男・小百合ご夫妻の麦作りについてこれまでの取組内容を紹介する。



堀川氏ご夫妻

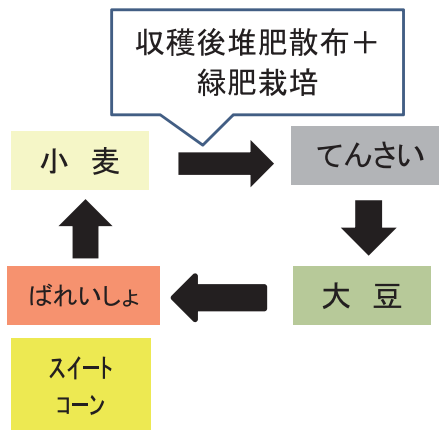


図1 輪作体系

表1 平成25年の栽培作物・面積など

作物名	栽培面積 (ha)	農家粗収益に占める割合 (%)
小麦	10.47	33.2
てんさい	12.82	33.1
澱粉原料用ばれいしょ	12.03	30.4
大豆	1.92	1
スイートコーン	1.3	2.3
合計	38.54	100

2 地域の特徴および経営概要

(1) 清里町の気象および土壌条件

気象は、オホーツク高気圧の影響が極めて強く、夏は温暖で雨量が少なく、冬は風が強いわりに積雪量は少なく、概ね大陸性の気候である。また、土質は火山性土で土地利用型農業を中心に経営が行われている。

(2) 経営規模と作付構成

堀川氏の経営面積は、清里町の平均に近い38ha。栽培作物は、秋まき小麦、てんさい、でん粉原料用ばれいしょが主体である。その他に輪作体系を考慮し、春まき小麦、大豆、スイートコーンを取り入れている。

小麦栽培は、秋まき小麦（きたほなみ）を約7.6ha、種子秋まき小麦（きたほなみ）2.0ha、種子春まき小麦（春よ恋）1.0haである。

(3) 家族構成と労働力

堀川氏は5人家族で、農作業は夫婦二人で行っている。

小麦栽培の労働は、種子小麦栽培管理にともなう異形株の抜き取りなど手作業を多く要し、夫婦間の協力と計画性が必須となる。

また、春の起生期には他の農作物の耕起、植付準備など労力が競合するため、秋まき小麦の起生期鎮圧作業等は奥さんが担っている。

3 小麦栽培の経過と特徴

(1) 輪作の状況

秋まき小麦の前作は、主にでん粉原料用ばれいしょの早掘となっている。小麦作付け後には堆肥散布を行い、その後てんさい、大豆

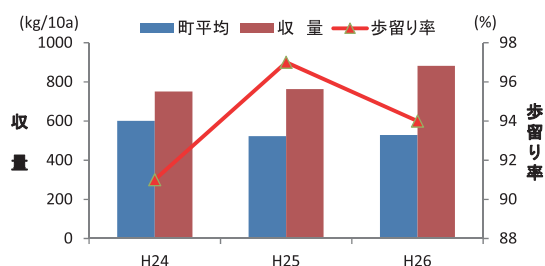


図2 堀川氏の収量および歩留り率など

の輪作体系である。

(2) 収量・品質

堀川氏は、種子栽培の向上を目的に平成22年に設立された斜里郡（斜里町・小清水町・清里町）3JA 種子生産運営協議会の初代会長（～現在）を務めている。

一般麦の品質も上位等級比率100%（3年平均 規格外除く）と高く、品質評価項目もすべて基準値内にあり、平成26年産秋まき小麦収量は、882kg/10aと過去最高反収となった。

4 技術の特徴

(1) 土づくり

ほ場は、乾性火山性土で保肥力が少ないため、町内の畜産農家と連携し、秋に麦稈（敷わら用）と牛糞堆肥（約200t）を交換している。翌春まで3回程度切り返し、完熟させたものを2作目の小麦後に4t/10a施用している。

また、堆肥散布後に後作緑肥（シロカラシなど）を作付けし、地力向上を目指している。



写真1 堆肥散布の様子

また、排水対策として、数年に一度秋にブルドーザーを使って心土破碎作業を行っている。さらにまた、土壌改良材として「ようりん」の施用を心がけている。

(2) プラソイラによる耕起

は種前の耕起作業は、麦を連作するほ場のみ、麦稈を鋤込むためにプラウで反転耕を行う。しかし、それ以外は、基本的にプラウによる反転耕はせず、プラソイラを使用している。「プラソイラによる耕起は省力化のために取り入れたが、腐植土を表面に残すためにも有効」とのこと。前述したように、乾性火山性土は保肥力が少ないため、反転耕すると養分の少ない下層土が上がり、作物の生育は芳しくない。作物の生育とは別に、雑草の繁茂が心配だったが、それも問題はない。

(3) は種作業での取組

小麦栽培は、何よりも初期生育が大切で、は種後に一斉出芽させることに気を配ってい



写真2 碎土・整地



写真3 麦を観察



写真4 越冬前の麦の生育



写真5 起生期の麦畑

る。ポイントは、は種深度3 cm程度を確保することが第一。そのため、碎土・整地はパワーハロー+パッカーローラによる整地・鎮圧も兼ね同時処理を1回だけに行っている。この方法は、は種精度が良く、しかも作業性も高い。

(4) 倒伏させない工夫

① 少量は種

目標穂数(600~700本/m²)に近づけるには、は種量のコントロールが第一である。近年、秋から冬期の気温が高めに経過することもあり、越冬前の気象予報に注意し、は種時期、は種量の設定を行っている。ここ数年のは種量は、6~6.5kg/10aである。少量は種により、越冬前にしっかりとした茎葉にすることを目標としている。

② 茎数・葉色に応じた追肥量・時期

越冬前小麦の茎数、草丈・葉色状況を把握し、生育ステージに応じたこまめな追肥(葉

面散布を含む)で、遅れ穂や倒伏させない小麦栽培を心がけている。そのためには、起生期の追肥量を少な目にし遅れ穂を少なくできれば、穂が揃い自然に歩留り率も向上する。

③ ケンブリッジローラーによる鎮圧

倒伏させない「丈夫な茎作り」のため、ケンブリッジローラーによる起生期と幼穂形成期前の鎮圧を2回行っている。1回目は、しぼれ上がった土を落ち着かせて根の張りを良くするため。2回目は、しっかりした株張りと根張りの効果を期待している。

(5) 病虫害防除と散布方法の工夫

除草剤や病虫害防除の水量は、作物の生育等に応じて低圧用ノズルを使用し、散布圧を通常より下げて40~60ℓ/10aの水量で散布している。このことにより、従来夫婦二人で行っていた農薬散布作業を、水汲みなどの労働時間を大幅に短縮できることもあり、現在

表3 平成26年産麦の施肥量 (単位: kg/10a)

区分	窒素	リン酸	加里	時期	備考
基肥	4.0	20.0	4.0	9月24日	(+ようりん)
	4.8			4月24日	硝酸カルシウム
追肥	4.2			5月8日	硫安
	2.4			5月30日	硝酸カルシウム
	3.8			6月8日	硫安
	0.3			6月23日	尿素葉面散布
	0.4			6月30日	ク
	0.4			7月3日	ク
	0.3			7月12日	ク
合計	20.5	20.0	4.0		

表2 平成26年産麦の病害虫防除

(単位：ml、ℓ)

対象病害虫	散布時期	使用農薬	農薬 使用量	散布 水量
雪腐病	2013/11/13	モンカットベフラン	200	80
赤かび病	2014/6/17	シルバキュア	50	60
赤かび病	6/23	ベフトップジン	100	60
赤かび病	6/30	シルバキュア	50	60
アブラムシ	6/30	バイスロイド	30	60
赤かび病	7/16	チルト乳剤	50	60



写真6 乳熟期頃の麦畑

は一人で行っている。

現在利用している1,500ℓの直装式スプレーヤーでは、従来の100ℓ/10a散布に比べ1.7倍の面積をカバーできる。

(6) 経営の特徴

これまでの経験をとおして学んだことは、夫婦二人でできる経営規模と土地利用型作目を中心に作目を選定し、無理・無駄のない経営をすることである。その一つが、農薬の散布水量を減らすことによる作業効率の向上で

あった。ゆとりのある「楽農」経営を目指し、家族の「遊び」の時間を増やすことを目標としている。

5 おわりに

今後とも「品質重視」の肥培管理を継続すること。麦作りは、「質が良ければ自ずと収量もついてくる」ことから、あらゆる気象災害にも左右されない安定した麦作りを目指している。

<堀川氏のコメント>

昨年、大きな賞をいただき大きなプレッシャーとなったが、自分の麦作りを見直す大きなきっかけともなった。今年は、失敗は許されないとこの思いでの麦作りだった。幸い、昨年より収量・品質とも上回り、これを機に今後もさらに安定した麦作りに励みたい。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋義雄)